

タイの孤児院　メーコックファームにおけるボランティア活動
文学部人文社会学科　社会情報学専攻　3年
合田　みらい

目次

1. 活動目的.....	3
2. メーコックファームについて.....	3
3. 現地活動について.....	4
3.1 行動日程	3
3.2 9日間の活動内容.....	5
4. 現地で支援活動に取り組む方々	7
4.1 アヌラック・チャイスリンさん	7
4.2 アリヤ・ラッタナウイチャイクンさん.....	8
4.3 中野穂積さん.....	9
5. 調査結果.....	9
5.1 子どもたちの生活環境.....	10
5.2 ファームの教育について.....	11
6.まとめ.....	11
7. 活動写真.....	12

■採用コース： 文学部学外活動応援奨学金 A コース（100,000 円）

■実施計画内容： 「タイの児童養護施設　メーコックファームにおけるボランティア活動」

■実施調査目的地： タイ・チェンライ県メーコックファーム

■調査期間：2018年8月21日（火）～2018年8月30日（木）

本稿では 9 日間の活動内容の紹介と調査結果をもとに、ファームで生活する子どもたちの現状を明らかにする。

1. 活動目的

今回、私はタイ北部チェンライ県にある「メーコックファーム」という児童養護施設に 10 日間滞在し、ボランティア活動を行った。この活動の目的は、①子どもたちが暮らすファームの生活環境、および②ファームでの教育プログラムを調査するとともに、③異なる文化をもつ他者との協力関係を築くことである。

また、この活動を計画した理由は、活動を通じて現地の子どもたちの生活を観察し、ファームの教育環境や生活環境が子どもたちの生活にどのような変化を与えているか、子どもたちの将来設計にどのように作用しているかについて、その一端を明らかにできると考えたからである。そして、学校教育とは異なるファームの教育プログラムを目近に観察することで、教育の多様性に触れる機会が得られると考えたためこの活動を計画した。

2. メーコックファームについて

今回の活動先は、タイ北部チェンライ市内から 20km ほど離れた山間部に位置するメーコックファームである。このファームは現在のファームのオーナーであるアヌラック・チャイスリン氏の夫、ピバット・チャイスリン氏と麗澤大学の竹原茂教授、聖学院高校教諭の戸辺治朗氏によって 1992 年に設立された。このファームの設立には、20 世紀後半にタイ・ラオス・ミャンマー山岳部の「黄金の三角地帯」で大量生産されていたアヘンが深くかかわっている。かつて地中海からインドを経てアジアに伝来したといわれるアヘンの栽培は、山岳地帯の貧しい農家の大きな収入源となり、タイの村や少数民族の間でも麻薬中毒患者が広まっていった。麻薬をめぐる深刻な状況を前にして、ファームでは現地のチェンライ教育大学の教員と学生の支援の下で「スタディーツアー」を開催し、少数民族の生活を経験することで地域の環境・麻薬・貧困・売春・教育の問題について考えを共有する取り組みを始めた。

また、1996 年～2000 年にかけてファームでは国内外の NGO や政府の協力を得ながら、現地の麻薬中毒患者の治療とリハビリテーション活動を行った。こうした麻薬患者の治療プロジェクトは、現在の総務省（国際ボランティア貯金）からの助成金も受けながら、151 人に麻薬治療とリハビリテーションを施した。治療を受けた患者 151 人のうち、男性 129 人、女性 22 人で、その中でもタイ人が 22 人、山岳民族は 129 人だった。

5 年間続いたファームでの麻薬中毒患者治療プロジェクトが 2002 年に終了すると、ファームを運営するメーコック財団では、村でのフォローアップのほか、麻薬やエイズで両親を亡くした子どもや離婚によって保護者のいない子どもたちを対象にした支援を始めた。そ

して、十分な食べ物も着る物もない中で生活をしてきた恵まれない子どもたちへの教育の重要性から、子どもたちの生活支援を現在に至るまで継続している。現在、ファームを運営しているメーコック財団は、2003年3月にタイ政府から正式に財団として認可された。

3. 現地活動について

ここでは、まず現地活動の内容について行動日程をもとに説明する。そして、(私が滞在中にお会いした) タイ北部で山地民の生活向上に取り組む方々の活動について紹介する。

3.1 行動日程

2018年8月21日(火) 00:05 羽田空港 発

4:35 スワンナプーム国際空港 着

7:25 スワンナプーム国際空港

8:55 チェンライ国際空港 着

9:30 ファームの管理者 アヌラックさんと空港ロビーで合流

12:30 昼食(チェンライ市内のショッピングセンターCenter Plaza)

13:30 チェンライ市内からチェンマイへ車で約3時間移動

16:30 チェンライ市内に到着 市内巡り(～19:00)

20:00 夕食 チェンライ市内のホテル泊

8月22日(水) 6:30 起床

7:30 朝食

9:30 アヌラックさんのご自宅の洋裁工房に移動(チェンマイ市内)

工房の様子を見学した後、チェンライ市のワットロンクン寺院へ約2時間半移動

13:00 ワットロンクン寺院到着後、見学(約1時間)

14:20 寺院からチェンライ市内の市場へ移動、夕食の買い出し ファームへ移動

16:00 ファーム到着 小学校から帰宅したファームの子どもたちと遊ぶ

18:00 夕食

8月23日(木) 7:00 起床

7:30 朝食

8:30～9:00 アヌラックさんにファームに関する質問

9:30 ファームの創設者 戸辺治朗先生のご案内でアカ族がすむパス村と

山村地域の Pha Khwang Witthaya School を見学

12:30 ファームに帰宅後、昼食

15:30 チェンライで『ABU-ALI Foundation』を設立したアリヤ・ラッタナウイチャイクンさんの工房見学、活動内容を伺う

18:00 ファームに帰宅

- 18：30 ファームの子どもたちと交流
19：00 夕食
- 8月24日（金） 7：00 起床
7：30 朝食
10：00 チェンライ市内から90kmのチェンマイ市ウィエンパオにある
青少年支援施設『暁の家』に移動
12：30 『暁の家』運営者の中野穂積さんと昼食
15：30 現地の学生とタイのお菓子「カオトムマツト」作り
19：00～20：00 中野さんによる施設設立経緯の紹介
- 8月25日（土） 6：30 起床 図書室清掃
7：00 朝食
9：00 中野さんが所有するコーヒー農園へ移動
11：00 農園到着
15：30 農園から長距離バスでチェンライへ
16：45 チェンライのバスターミナル着 ファームへ車で移動
17：30 ファーム到着 子どもたちと交流
18：30 夕食
19：30 子どもたちと交流
- 8月26日（日） 6：30 起床
7：00 朝食
9：00～12：00 教会でミサ
13：00 子どもたちの昼食準備の様子を見学
17：00～18：30 子どもたちと散歩
19：00 夕食
20：00 子どもたちと交流
- 8月27日（月） 5：30 起床
6：50 学校に登校する子どもたちのお見送り
7：00 朝食
8：00 チェンライ市内へ移動
12：00 昼食
16：00 近隣のエレファントキャンプを見学
18：00 夕食
22：30 女子寮で子どもたちと交流
- 8月28日（火） 6：20 起床後、清掃活動
6：50 子どもたちのお見送り
7：30 朝食

- 12：00 昼食
- 13：00～14：30 ファーム周辺の清掃活動
- 15：00～17：30 現地の小学校まで子どもたちのお迎え
- 18：00 夕食
- 22：00 女子寮で子どもたちと交流
- 8月29日（水） 5：40 起床
- 5：50～6：40 清掃活動
- 6：50 お見送り
- 7：00 朝食
- 9：00 チェンライ市内のショッピングモールで夕食の買い出し
- 12：00 昼食
- 16：30～18：00 子どもたちと交流
- 18：00 夕食
- 19：00 集会所で子どもたちと交流
- 8月30日（木） 5：30 起床
- 5：45～6：45 清掃活動後、子どもたちのお見送り
- 7：00 朝食
- 8：00 ファーム出発 チェンライ空港へ
- 9：30 チェンライ空港到着 アヌラックさんとお別れ
- 9：45 チェンライ国際空港 発（11：15 スワンナプーム国際空港 着）
- 13：55 スワンナプーム国際空港 発
- 22：50 羽田空港 着

（外務省の海外安全情報では、滞在中にタイ北部チェンライ県における感染症などの危険情報は確認されなかった。）

3.2 9日間の活動内容

8月21日（火）は日本から約6時間のフライトでチェンライ国際空港に到着し、ファームの管理者アヌラックさんと合流した後、アヌラックさんにチェンマイ市とチェンライ市内の観光場所で行き先のある寺院を車で案内して頂いた。現地の気温は約30度で、急に強い雨が降り出すこともあり天気は不安定だった。

8月22日（水）夕方、ファームで生活する子どもたちと初めて会い、簡単なタイ語で自己紹介した後に小学校低学年の男の子たちとお絵描きやコマ遊びをした。その日の夕食は、創設者のひとりである戸辺治朗氏や日本からファームの視察に来た高校教諭らとともにアヌラックさんの手料理を頂いた。

翌23日(木)は朝食後、アヌラックさんにファームについての質問(子どもたちの人数やファーム内の教育など)をお伺いした。その後は戸辺先生のご案内で、ファームから車で約45分のアカ族が暮らすパス村(カトリックとプロテスタントの教会や作物の貯蔵庫)を見学させて頂いた。約70年前から存在するパス村は現在の人口が300~500人で、村の若い世代は中学校のある町や出稼ぎのためにバンコクへと流出しているという。

また、山村地域のPha Khwang Witthaya Schoolで学校図書館の内部を見てみると、日本の学校図書館と同様にPCが設置されており、ネットを利用した調べ学習にも対応できる環境であった。筆者が(幼稚園~中学校まで同じ敷地内にある)Pha Khwang Witthaya Schoolを訪れたのは、午前12時近かったので、政府から無料で支給されている制服の上に白衣を着た生徒たちの姿がみられた。学校へ向かう途中に民家はあまり見当たらなかったため、市内から離れた山間部に住む子どもの多さが印象に残った。幼稚園児は10名以上が在籍しており、教室番号がタイ語のほか中国語で書かれた中学校の教室には3クラスに5、6名ほどの生徒が授業を受けていた。

同日午後は、『ABU-ALI Foundation』を設立したアリヤ・ラッタナウイチャイクンさんの工房見学と(タイ北部で暮らす)アカ族の女性の社会的立場について説明して頂いた。アリヤさんについては、「3.3 山地民の生活向上に取り組む方々」で後述する。

翌24日(金)は、日本人のファーム宿泊者と午前10時にファームを出発してバスを乗り継ぎ、チェンライ県ウィエンパオ郡にある青少年施設『暁の家』で寮母をされている日本人の中野穂積さんとお会いした。中野さんの活動についても後に改めて説明するが、山間地域の貧しい子どもたちにも教育の機会をあたえることで、「生きる力を身につけてほしい」という思いから『暁の家』は設立されたという。筆者は、午前12時頃に現地に到着し、『暁の家』で生活をする生徒たちの料理を頂いた。午後3時からバナナの葉を使った北部の伝統的なお菓子「カオトムマツ」作りを女子生徒数名と一緒に体験した。そして、午後19時から日本の大学生とともに中野さんの『暁の家』を中心とした取り組みについてお話を伺った。

翌25日(土)は生徒と一緒に朝食前の清掃をして、午前9時に中野さんが現地住民と取り組むコーヒー栽培の様子見学のため、標高1,250mの山あいにあるコーヒー農園へ車で向かった。2011年6月に約50万本植えられたコーヒーの木には青々としたコーヒーの実がついており、10月末~2月には赤く熟した実を収穫し、暁の家の生徒たちがコーヒー豆の選別や焙煎をして商品化するという。農園の様子を見学した後は、昼食に現地の伝統的な料理を頂き、農園を午後15時に出発し、長距離バスで約2時間かけてメーコックファームに到着した。ファームに到着した後は夕食を頂き、日本から持参した風船で子どもたちといす取りゲームなどをして遊んだ。

翌26日(日)は、朝食後にファームの敷地内にある教会で3時間のミサが行われた。ミサが終わると、子どもたちの自転車に乗る練習のサポートやお絵描きした絵を見せてもらった。午前12時に昼食の時間になると、食事当番である年長の子どもは自分たちでお

米を炊き、野菜炒めを料理していた。その日の夕方、私はファームの女子生徒がファームから徒歩 40 分の温水プールへ遊びに行く時に同行し、指差し手帳を使って子どもたちと簡単なタイ語のやり取りをしたり、子どもたちが練習しているアンジェラ・アキの『手紙』という曲を帰り際、一緒に歌った。

翌 27 日（月）は、ファームから徒歩 40 分の距離にある小学校へ通う子どもたちのお見送りをした後、アヌラックさんと車でチェンライ市内へ料理の買い出しに出かけた。午後には近隣のエレファントキャンプを見学し、夕食後は 8 名が生活する女子寮でダンスやゲームをして遊んだ。

翌 28 日は早朝ファーム周辺の清掃をした後、車や自転車で学校へ行く子どもたちのお見送りをした。夕方には小学校までファームの子どもたちのお迎えに行き、夕食まで子どもたちとミニゲームをして楽しんだ。

翌 29 日は午前中にアヌラックさんに連れられて市内の市場やショッピングモールで夕食の買い出しをし、夕食後は子どもたち全員とチーム対抗のゲームやダンス、歌を歌い子どもたちと楽しい時間を過ごした。

活動最終日の 30 日（木）は、早朝の清掃活動を終えてから学校へ行く子どもたちやファームのスタッフと最後のお別れをし、午前 8 時にアヌラックさんの車でファームを出発した。午前 9 時半頃にチェンライ国際空港に到着し、活動中に大変お世話になったアヌラックさんともお別れをした。その後、予定時刻通りバンコクのスワンナプーム国際空港を中継し、羽田空港に午後 23 時ごろ到着して今回の活動を終えた。

4. 現地で支援活動に取り組む方々

今回の活動を通してお会いした、山岳民族や子どもたちの支援活動に長年取り組んでいる方々を紹介したいと思う。まず、今回の活動の機会を与えて下さったメーコック財団のアヌラック・チャイスリンさん、そして日本人で 1 人『暁の家』の寮母をされている中野穂積さん、最後に山岳民族の女性の意見を取り入れた活動をされているアリア・ラッタナウイチャイクンさんの 3 名である。

4.1 アヌラック・チャイスリンさん

はじめに、メーコック財団の創設者ピパット・チャイスリン氏の妻であり、現在ファームの管理を担当しているアヌラックさんについて紹介する。アヌラックさんは、1971 年に設立されたタイ・バンコクの公立大学（ラムカムヘン大学）を卒業した後、ピパット・チャイスリン氏と結婚した。アヌラックさんが通ったラムカムヘン大学は、23 か所の地方キャンパスがあり、現在在籍している学生約 2,200 名のうち約 6 割を 74 か国もの留学生が占めているという。

結婚後は長女の育児をしつつ、ピバット氏と共同でファームの運営に取り組んだ。現在は、チェンマイ市内のご実家にある衣服製造工場で現地の女性に働く機会を提供しているほか、ファームの子どもたちの保護者やファームのゲストとボランティアへの対応をスタッフと協力して行っている。毎年、ファームにはスタディーツアーのために現地や海外からの学生や大人たちが滞在するため、アヌラックさんやスタッフは現地の食材を使った食事でゲストをもてなしている。私がファームに滞在中には、日本からファームの視察にきた教員や学生がおり、ファームでの生活を体験していた。こうしたゲストの宿泊費は財団の収益の一部として、子どもたちの教育費用にあてられる。

4.2 アリヤ・ラッタナウイチャイクンさん

次に紹介するのは活動3日目にお会いしたアリヤ・ラッタナウイチャイクンさんである。アリヤさんはタイ・チェンライ県アカ族の村出身で、当時の村には学校や道路、電気もなかった。教育環境が整備されていない村で、アリヤさんが初めてタイ語を習ったのは6歳の頃だった。当時は社会福祉担当が村の子どもたちにタイ語を教えるため、村を訪問していたという。そして、アリヤさんは12歳で僧侶になり18歳まで勉強を続けた後、チェンライの農業高校を卒業した。卒業後はNGO活動に入り、1994年10月に農業研修生として1年間鹿児島で農業技術と日本語を習得した。帰国後は、山岳民族の諸問題(国籍や教育、環境、麻薬、人身売買、エイズなど)に取り組み、1996年に非営利組織『村の教育と開発のためのアブ・アプロジェクト』を設立した。このプロジェクトの設立背景には、タイの山岳民族の多くが国籍や選挙権、学校教育を受ける権利も与えられず、一般的な国民が享受する各種の保障を得られていないことから、低地タイ民族と比べ日常生活や教育、雇用において圧倒的に不利な状況におかれているという現状が深くかかわっている。現在では、100万人を超えるといわれる山地民のうちの2割から3割が未だタイ国籍を取得していないといわれている。

アリヤさんはこうした不安定な山岳民族の立場をふまえ、山岳民族のコミュニティーの自立を目指した地域密着型の団体として活動を開始し、①村の教育②伝統文化の保存と異文化交流③環境保全④手織りや刺繍などの手仕事を活用した副収入源の確保という4つの活動目的を掲げている。特に村の女性グループが率いる④の手工芸プロジェクトでは、山岳民族の手工芸を通して先進国との関係をつなぎ、活動利益の一部を家族の医療費や子供の教育費に充当しており、山岳民族を取り巻く環境の改善へとつながりつつある。

4.3 中野穂積さん

現在チェンライで青少年支援施設『暁の家』を経営している中野さんは、10代の頃からタイ北部の農業技術支援に取り組み、現地のスタッフに日本語を教えていた。中野さんが現

地住民に野菜作りを指南していた当時、タイ北部の山間地には山地民が 55 万人ほど居住しているといわれており、(村に小学校や中学校がないために) 現地の子どもたちは学校教育を受けられない状況だったという。

こうした山間地における教育環境の現状やリス族の学生の要望をうけ、中野さんらボランティアスタッフは 1987 年 5 月にチェンライ県メースワイ郡の山村ティンドーイに「リス生徒寮」を設立した。そして、中野さんはリス生徒寮で寮母としてリス族の中学生 11 人と共同生活を始めると、日本やタイ国内からの支援をもとに進学支援の「ルワンアルン奨学金」(注)を発足し、1995 年には第 2 寮『暁の家』をチェンライ県ウィアンパオに開設した。この『暁の家』では、保護者にも責任をもって子どもを送り出してもらうために生徒 1 人に対し年 2,000 バーツ (日本円で約 6,000 円) を徴収しているという。

(注：1994 年に開始した「ルワンアルン奨学金」は、学習意欲がありながら経済的に困難な山岳民族の学生に教育を受ける機会を提供することを目的としており、1 年ごとに選考される山地民の高校生・大学生を対象とした奨学金制度である。奨学生は合宿や交流会、田植えなどの行事に年 8 回参加し、教育上や山地民であるがゆえの悩み、伝統文化継承の方法などを一緒に考え学びあう機会としている。)

そして、2000 年には第 12 期生を送り出したリス生徒寮が活動を終え、『暁の家』も 2015 年に生徒寮としての活動を終了すると、困窮家庭の青少年を対象にした職業訓練センターとして新たなプロジェクトをスタートした。(『暁の家』という名前には、「山の頂から新しい世界を見渡し、深い闇夜の底から立ち昇る暁の光を目指して歩き出そう」という願いが込められている。)

このプロジェクトでは、2011 年からコーヒーの有機栽培や加工販売を通して山間民に持続型農業支援を行っているほか、山間部の保育園や小学校の設立支援や移動図書館活動、山地民婦人による手工芸を販売し、女性たちの副収入を得る機会と伝統文化の保存にも取り組んでいる。また『暁の家』では、日本の支援者や見学者、研修生のスタディーツアーを受け入れ、相互理解と学びの場を提供している。

私が活動 4 日目に『暁の家』を訪問した際、タイ国籍を取得するために勉強している研修生が 12 名ほどおり、異なる文化をもつ民族が食事や掃除などを協力しながら共同生活を送っていた。

5. 調査結果

今回のボランティア活動では、子どもたちの生活を観察し、アヌラックさんに子どもたちの家庭状況についてお話を伺うことで、メーコックファームの生活環境や教育プログラムについて調査を進めた。ここでは、調査から明らかになった子どもたちの生活環境とファームの教育について考察する。

5.1 子どもたちの生活環境

今回、ボランティア活動を通して出会ったファームの子どもたちは8歳～19歳の女子9名と男子14名で、最年長の男子は地元の大学に通う1年生である。子ども達は家庭の経済的事情だけでなく、身近な薬物や性犯罪などの危険から身を守るためにメーコック財団の支援を受けている。

23名の子どもたちが暮らす生活スペースは、生徒寮と炊事場が併設された平屋の建物、聖書の勉強を行う自習室である。こうしたファーム敷地内の建物の多くは、世界中から訪れたボランティアの手で建てられており、ファームの川沿いに建つゲストルームやウッドデッキなどもその一つで、建物のいたるところに建築に携わったボランティアの名前が刻まれていた。

まず女子寮を見学させてもらおうと、大部屋に9人分の子ども用ベッドと1人ひとりのロッカーがあり、部屋の奥には浴室や洗面所があった。男子寮は、3部屋に分かれて年少から小学校高学年の子どもたちが共同生活をしていた。

そして、子どもたちが食事を作るために用意された炊事場の隣には、食卓が並んだ部屋がある。毎日、子どもたちは全員で食事をとり、放課後や週末はそれぞれ自習や遊び場として利用している。

また、毎週日曜日の午前中、子どもたちはファームの敷地内に建てられた教会でミサに参加しているほか、自習室では夕食後にファームで暮らす牧師と聖書を学んでいる。

そして、筆者が滞在中にファームで生活していた子どもたちの平日のタイムスケジュールは以下のようになっている。

午前6:00 起床/朝食の準備（食事担当）

6:10～6:40 朝食 片付け

6:50 学生寮の前に整列 ファームの牧師から朝の挨拶

7:00 学校へ出発（ファームスタッフが運転する車や自転車で通学）

9:00～16:00 授業時間（12:00～給食）

午後16:00 下校

16:30～18:00 自由時間 夕食準備

18:30～19:00 夕食 片付け

19:30～ 自由時間

現在、平日に学校へ通う子ども達の教育費はメーコック財団が負担しており、保護者は子ども達の保険料として年間280バーツの支払いをしているという。土曜日は一日自由時間で、毎週日曜日の午前9時～12時はミサが行われている。滞在中、ファームの子どもたちは自由時間になるとアヌラックさんからお小遣いをもらい、近隣の売店や温水プールに遊びに行く様子もあった。ファームの入り口付近は比較的車通りの多い道路で、早朝の清掃活動をしていると道路脇にビンやお菓子の袋が捨てられており、通学路を裸足で歩く子どももいたため、割れたガラスビンやプラスチック製品は非常に危険だった。

また、子どもたちの生活を観察していると、基本的に子どもたちが食事を作り、掃除洗濯や学校の制服のアイロンがけも自ら行っていた。

5.2 ファームの教育について

アヌラックさんにファームの教育についてお伺いすると、かつてはファームで縫物などの手工芸を子ども達に教えていたという。そして、近年は海外ボランティアがファームに滞在した際、子ども達に英語や日本語を教えたり、日本からゲストとして訪れた音楽家による野外コンサートを開催し、子ども達に音楽を楽しんでもらうイベントも行われた。

筆者がファームに滞在中、子ども達は夕食後にファームのスタッフとタイ語や社会の勉強をする時間があり、少人数のグループで学習に取り組んでいた。

そして、アヌラックさんによるとファームを卒業した子どもたちの進路としては、大学進学やホテル業に就職することが多いという。過去の卒業生の中には、学業が優秀だったために日本の大学へ1年間無償で留学した学生もあり、タイの経済成長とともに子ども達の教育環境も変化している。

現在、タイでは中学校まで義務教育となり、教科書や授業料などは高校まで無償である。そして、制服代も政府から毎年支援が届くため、メーコックファームをはじめ生徒寮も依然と比べ増えたという。

6. まとめ

今回の活動は子ども達の生活環境を間近で観察し、アヌラックさんにお話を伺うことで子ども達を取り巻くタイの地域問題について考える機会となった。活動中、アヌラックさんのもとで生活するファームの子どもたちの様子をみると、年齢や出身の違う子ども同士が協力して食事作りや勉強、教会のミサの準備に取り組んでいた。現在、ファームでは職業訓練や独自の教育プログラムを行っていないが、ファームにおける共同生活の中で相互理解を深め、自立した生活を送ることが子ども達の将来に活かされるのではないかと感じた。

また、ファームの子ども達が抱える家庭の問題には両親の離婚や貧困、薬物など様々なケースがあった。特に、かつて地域に広まった薬物の危険性は大人だけでなく子どもにも及んでいる。地域社会の中で自身の置かれている状況を理解できない子どもが、薬物や窃盗などの犯罪に関わることを未然に防ぐためには、メーコック財団や現地のNPOによる子ども達の教育支援は必要不可欠である。今回、現地で地域コミュニティー支援に取り組むアリヤさんや中野さんのお話を伺うことで、こうした子どもへの教育支援が将来の地域社会の在り方を左右するのだと思った。この活動を通して、今後はタイ政府が家庭に問題を抱えた子ども達のセーフティーネットをどのように構築しているのかということ进行调查していきたいと思う。

< 活動写真 >

①タイ・チェンライ県の上空の様子 (2018-8-21)



②チェンライ国際空港到着 (2018-8-21)



③ワットロンクン寺院 見学 (2018-8-22)



④ メーコックファーム入り口 (2018-8-23)



⑤ ファームの食堂 (2018-8-28)



⑥ファームの女子寮 (2018-8-28)



⑦ファームの男子寮 (2018-8-28)



⑧子ども達の食卓 (2018-8-28)



⑨炊事場 (2018-8-28)



⑩ファーム沿いを流れるコック川と周辺の様子 (2018-8-28)



⑪ファームの子ども達 (2018-8-29)



⑫子ども達を通う地元の小学校と通学時の様子 (2018-8-28)



⑬中野穂積さんと『暁の家』の学生たち (2018-8-25)



⑮コーヒー農園からの景色



⑭アヌラックさんと市場で買い物の様子 (2018-8-22)



⑯活動3日目に訪問した Pha Khwang Witthaya School の図書室の様子 (2018-8-23)



⑯活動最終日に撮影したアヌラックさん (写真右) との写真 (2018-8-30)

